

ネグリゾクトニア葉鞘腐敗病の発生について

- (1) 病 害 名 : ネグリゾクトニア葉鞘腐敗病
- (2) 病 原 名 : *Rhizoctonia solani*
- (3) 発生作物 : ねぎ

1 発生の経緯

令和2年7月上旬、仙台地域のねぎ栽培ほ場において、株の外側の葉鞘が地際部で腐敗し、倒伏する症状が確認された(写真1・2)。また、本症状は、地際部のみに連続して見られた。

当所において、本症状を呈した株から常法により組織分離を行ったところ、*Rhizoctonia* 属菌が多数確認された。それらについて、宮城県農業・園芸総合研究所で遺伝子診断(PCR法、ITS領域の遺伝子解析)を実施した結果、本県では未確認であった *Rhizoctonia solani* AG-4 HG-I(写真3)によるネグリゾクトニア葉鞘腐敗病と確認された。その後、発生状況の継続調査を行ったところ、当該ほ場での発生は続いているが、発生地域の拡大は認められていない。

本病は平成17年に北海道で初めて発生が確認され、現在では青森県、岩手県で発生が確認されている(令和4年12月15日現在)。

2 病徴

- (1) 土に接触した葉鞘及び葉身基部のみに軟化、腐敗が見られ、地際部から倒伏・枯死するが、株全体が枯死することはない(写真1・2)。
- (2) 罹病葉は淡褐色を呈し、引っ張ると容易に抜ける。
- (3) 外側から2~3枚までの葉鞘での発病が多く、その場合は出荷調整時に除去できる。
- (4) 畝単位で発生することが多い。

3 発生生態

- (1) 糸状菌(*Rhizoctonia solani*)による土壌伝染性の病害であるため連作ほ場で発生しやすい。
- (2) 罹病残渣上や土壌中で越冬した菌糸や菌核が一次伝染源となる。
- (3) 一次伝染源から伸長した菌糸が土寄せによって葉鞘や葉身基部に接触、感染し、発病に至る。
- (4) 生育適温は19~23℃とされ、日平均気温が19℃以上で発生する。

4 防除対策

- (1) 連作を避け、被害残渣は適切に処分し、長靴の底や作業機械の洗浄を丁寧に行なう。
- (2) 本県で日平均気温が19℃に達するのはおおよそ6月下旬頃であり、ほ場をよく観察する。
- (3) 土寄せを深めにすると発生が助長されることから、1回の培土量は少なめにし、土寄せの回数を増やす。
- (4) 多発する場合は、土寄せ直前に薬剤を散布する(表1)。

表1 ネグリゾクトニア葉鞘腐敗病に適用のある薬剤

FRAC コード	有効成分名	薬剤名	希釈倍数・ 使用量	使用時期	本剤使用回数
11	アゾキシストロビン	アミスター20 フロアブル	2000 倍	収穫3日前まで	4回以内
14	トルクロホスメチル	リゾレックス粉剤	30kg/10a	土寄せ前 但し、収穫 14 日前まで	3回以内

※令和4年12月7日現在の登録内容（FRACコードは、殺菌剤の作用機構分類を表す）



写真1 地際部から倒伏・枯死した外葉



写真2 外葉基部の腐敗



写真3 *R. solani*の菌糸

《お問い合わせ先》

宮城県病害虫防除所

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17

TEL:022-275-8982 FAX:022-276-0429

E-mail:byogai@pref.miyagi.lg.jp

★宮城県病害虫防除所から『メルマガ』で

発生予察情報の発表をお知らせしています★



宮城県病害虫防除所
トップページ



メルマガ
登録フォーム